ホガースの優美論
—ダンス美学に向けて—

国士舘大学　木村　覚

1．研究の目的と方法

近年ダンス美学は，自律的な芸術の一ジャンルとしてダンスを捉え，また表現媒体が身体そのものであるその特殊な性格を省みて，「スタイル」「作品の同一性」あるいは「身体の意味作用」（すなわち「ダンスとは何か」）を主に研究してきた。反面で，見る者（また踊り手）が最も直接にまた豊かに感受しているはずの，ゆえに基本的な研究対象であるはずのダンスの動きに関する感性的価値の問題（すなわち「よいダンスとは何か」）を，ダンス美学は殆ど取りあげずにきた。この事実は，批判的に指摘される必要があるだろう。

この価値の点に注目する希少な研究者の一人，F. スパーショット（1926-）は，「ダンスがダンスとして中心におく諸価値は，芸術の記号論からも，同じく個人の動機と社交上の約束事の現実や象徴化からも分離される，ダンスの運動において訓練された身体がもつ諸々の卓越でなければならない」（F. Sparshott, *A Measured Pace*, 1995）とし，紆余曲折の議論を重ねた後，優美がダンスの基本的な価値であろうとみなすに至る。とはいえ，これは何ら特別な結論ではない。なぜなら，近代的なダンス芸術が成立する以前から，宮廷的社会を中心としそこから派生した諸々の社交の場において，挙措振る舞いあるいはダンスは，その感性的な価値をもっぱら優美に置いてきたからである。なるほど古代ギリシアの三美神を神話的起源とする優美は，発端からダンスと繋がっていた動きの美であり，それをダンスの感性的な価値とみなす考察は，ルネサンス期のB. カスティリオーネを先達とし一八世紀にとくに隆盛を極めたとはいえ，二〇世紀前半にいたってもなお継続されたものであり，その論者は広範囲にわたりまた枚挙に暇がない。

勿論優美がもつ特殊な傾向（もっぱら女性的なものとみなされてきたこと，また西洋近代の社交においてとりわけ重視された点など）が，研究に制約を与えると予想されるかもしれない。ただし「ダンス」と呼ばれる多種多様な動きの本質に，優美の諸性格が何らかの連関をもつものであるならば（発表者はそう考える），豊かな考察を含みながらも殆ど注目されずにいる幾つかの優美論を検討することで，ダンス美学は，単にダンスの感性的価値を解明するに留まらず，その価値の論理から，先のジェンダー的または権力論的な問題等を炙り出すことも出来るに違いない。本論ではこの点に触れないものの，発表者の研究動機にこの論点が含まれていることは，あらかじめ断っておきたい。

以上の関心と展望を背景に，本発表の課題は，後代の美学研究者のみならず，J. G. ノヴェール（1727-1810）にも一部影響を与えたと推測されている（cf. L. Kirstein, *Movement & Metaphor*, 1971），W. ホガース（1697-1764）の優美論にとくに注目し，蛇状曲線を優美とみなす彼の思考から，ダンスの感性的価値がもつひとつのあり方を探ることである。

2．課題の考察

風刺画家であったホガースは，『美の分析』(1753) を著し，そこで優美を「蛇状曲線 serpentine line」のなかに捉えた。「最も優美な諸々の形はその内に最も僅かにしか直線がない」とするホガースにとって，「複雑さintricacy」こそ，美と優美の諸原理のなかで最も重要なものである。その端的な例は人間の形姿と動きに求められ，とくにあげられるのは，メヌエットやカントリーダンス等の光景であった。そのような彼の眼差しに従うならば，「ダンスの真の精神」とは「優雅な放縦elegant wantonness」なのである。

主たる原理を「複雑さ」に置くホガースの優美論はその根底に，能力の限界まで対象を追跡しようとする目の逸楽の美学をもつ。J. アディソン（1672-1719）の「想像力の快」に影響を受けたこの考えには，既知のものに未知のものを繋ぎ合わせる機知の働きがともなっている。重要なのは，複数のものを繋ぎ合せる際の形である。その結合には量の上での偉大が求められるが，過剰をもってなされる場合には，ぎこちない形のなか気品を欠き滑稽になる。反対に，例えばスフィンクスが賞賛されるのは，獣の強さと人間の美しさが喜ばしい優美な形のなかで結合されるからである。この形の思考は身体の動きの優美に敷衍される。そこでは結合の偉大さは，多方向性として論じられることになる。身体がなす蛇状曲線の立体的な動きは，不断に変化する線の多様な流れとして優美を喚起する。ここでも過剰は線の屈曲率の点で避けられねばならない。優美な身体の動きは，機知の働くような量の偉大を保ちながらも，笑いを起こす線とは異なる適度に緩やかな屈曲をもって，多様な方向を滑らかに繋いでゆくのである。

3．結論

不規則な動きこそ眼を魅了する複雑さの原理にかなう，こうした考えから優美をダンスの理想とするホガースは，不断に逸脱のきわを通りつつも回避し，多方向性をはらみつつもリズミカルに流れる動きに，ダンスの感性的価値をみとめたのである。